

筆者



最近になって、札幌に自主避難してきた若いお母さん方と出会い、彼女らの「3・11語り場」証言を聴き、内部被ばくを怖れての移住はすべて正解であったの思いを強くし、その実行にいたるまで

封印した記憶を解いてみる

一日立く札幌 自主避難の記

小沼 絃美

あれから、2年4カ月という歳月。それは、何もかもがリセットされ、俄か道産子の我が家が新生し、札幌の自然と人々の優しさに癒され、はげまされ、導かれた、密度の濃い時間の集積。

2011年3月18日より、娘宅（賃貸マンションの2F・2LDK）に同居すること3カ月。幸いにも、同じマンションの1Fに空き部屋が発生。直ちに引越しの段取りに取りかかり、夫の友人や在京の息子の手を借りて、築26年木造2階建て家屋内の膨大な断捨離を、10日間で果たし、生涯最後の大事業・移住を完遂。腰痛に悩まされながら、微調整的断捨離を継続し、日常生活のリズムを整える。この地で暮らしていく覚悟から、暮らしていく感謝に至るまでに要した時間の集積でもあります。

の一人ひとりの証言の重さを聴くわたしたちが、しっかりと受け止めることの大切さに気付かされました。

やがて二人合わせて160歳になろうとするわたしたちですから、夫の生まれ育った故郷での質実剛健を柱とする年金暮らしといえども、いずれは終止符が打たれることと、常日頃から覚悟はしておりました。

以下、封印していた脱出時前後の顧みです。

札幌在住の娘とそのパートナーによるフ

クイチ情報の提供と支援物資（ゆうパックを毎日郵送）、助言と懇願と入念なフォローにより、迷い続けた日立脱出を18日と決断。高速バスと飛行機のチケットの予約が整う頃、近隣への挨拶（一時避難する旨）を済ませる中で知る、人の情けの温かさ。〈留守だと悟られぬように、ガレージにうちの車を置かせてもらいますよ〉と申し出てくれたお向かいさん、実家から貰った飲み水を（少しばかりですが）と2Lボトルで2本も届けてくださるお隣さんや団地内に住む大学の後輩。18日早朝、後ろ髪を引かれる思いで、当座の着替えをスーツケースに詰め込んで、朝日の眩しさに目を瞬かせながら、まだ水道が回復しないままの我が家を後にする。

開通して2日目の高速バスに、駅前から

乗り込む。大型バスながら、乗客は幼い子ども連れの家族が数組と顔見知りの単身者（女性）。お互いの決断に至った顛末を語り合い、その根拠が我が子からのネット情報であることに、意を強くしあう。彼女とは、東京駅で別れ、タクシードで羽田へ。空港は南行き（関西方面）が混み合い、外人客が目立つ。やがて、搭乗。エンジン音が讚美歌の『主よ、みもとに近づかん。十字架の道 行くとも……』に聞こえ、思わず、前夜血尿だった夫の顔を見やる。「間一髪からの脱出」を実感。娘の出迎えを受け、身体の震えは止まるが、幻聴は数日間残る。

（おぬま・ひろみ/本会会員）

